The Japan Society of Educational Sociology

日中比較における文化的説明の妥当性

高橋克巳（名古屋大学大学院）

1．はじめに

近年エスノグラフィの手法を用いて教室レベルの日米比較研究が行われるようになり、我が国の学校教育においてこれまで自明視されてきたさまざまな考え方が浮き彫りにされてきた。たとえば、「性善説的な子ども観」「努力重視の能力観」「全人教育への志向」等である。このように両国の教室内の現実に見られる様々な差異を、人々の価値観・考え方の差異によって説明しようとする仕方を「文化的説明」と呼ぶことができる。それに対し、両国の差異は政治的・経済的・社会的な条件によって、構造的に規定されたものとして捉える解釈もありうる。これは「構造的説明」と呼ぶことができる。

言うまでもなく、一国の現実は、経済・社会・文化等、さまざまな要因に規定されつつ成立しているのであり、いずれか一つの説明のみが正しいということではないだろう。いずれも説明も一定の範囲で妥当すると見るべきであり、むしろ一つの説明に偏ることが問題である。実際、これまでの日米比較研究一般においては「文化的説明」に偏っていることが指摘されてきた（恒吉、1992）。

東洋と西洋のように、文化的な差異の大きな社会を比較する場合、まず「文化的説明」を目指すことには十分意味があると思われるが、東洋の国同士を比較する場合はどうか。「文化的説明」がどの程度妥当か。本発表では、筆者が行った日中比較研究をもとに、こうした問題について考察を深めることを目的とする。

2．調査の概要

本調査はもともと、日本と中国の学級経営におけるあり方を比較・検討することによって、我が国の小学校の学級が有する基本特性を明らかにすることを目的に行われたものである。まずその概要を説明する。

(1)方　法

方法的には日米比較研究で行われたいくつかの方法を日中比較に応用している。まず、観察およびインタビューである。

対象とした学校・観察期間は以下の通り：

日　本：中部地方Ａ市内の公立Ｃ小学校５年２組
（1996年５月～６月、約２ヶ月間）
〃　近郊の公立Ｄ小学校４年３組
（　〃　）
中　国：東北地方Ｂ市内の公立Ｅ小学校４年３班
（1997年３月～６月、約４ヶ月間）
〃　の公立Ｆ小学校３年２班
（1997年５月～６月、約２ヶ月間）

同校へは週一回程度通い、一回につき登校時から下校時まで、主に一つの学級を集中的に観察した。

もう一つ方法は、観察に際しビデオ撮影を行い、それを短く編集した上でそれぞれ相手国の教師・学生等に見てもらい、意見を求め、その感想の中に両国の考え方を探ろうとするものである(Tobin et.al., 1989)。その感想を比較することによって、学級経営に関する考え方の違いという、直接観察することのできないものを浮き彫りにすることができると考えた（ビデオテープの内容、編集方針、感想の収集過程等に関する詳細は、当日報告予定）。

(2)結　果

①中国の学級の実際

筆者が観察した中国の学級は、学級の編成様式と組織形態、子どもたちの学校生活等、日本の学級と大きく異なる面があった。たとえば、教科担当制・６年間を通じて編制変えのないこと、60人にものぼる大規模クラス、給食や一斉掃除のないこと、輔導課と呼ばれる補習授業・少年先鋒隊・定期試験の存在、等である。

②相手国のビデオテープを見て出された感想

日本人と中国人にそれぞれ相手国ビデオを見て出された感想を、ＫＪ法を参考に構造化した。第二レベルまで構造表を以下に示す。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

・中国人から見た日本の学級教育

1 日本の小学校の良い点(241-253/494)

1.1 子どもの全面発達を促す教育(93-94/187)

1.2 民主的で子ども中心の教育(81-76/157)

1.3 教師－子ども・子ども同士の関係が親密・協調的(14-32/46)

1.4 教育環境が整っている(24-5/29)

1.5 衛生・安全を重視している(8-15/23)

1.6 子どもの叱り方が良い(10-6/16)

2 日本の小学校の悪い点(146-181/327)

2.1 子どもの自由・自主の度が過ぎている(51-73/124)

2.2 基礎的な知識をきちんと学習させていないように見える(65-56/121)

2.3 学級担任制は疑問である(18-7/25)

2.4 子どもの叱り方が悪い(2-20/22)

・日本人から見た中国の学級教育

1 中国の小学校の良い点(67-149/216)

1.1 子どもが年のわりにしっかりしている(24-50/74)

1.2 学校では勉強はしっかりやり自由な所は自由(15-19/34)

1.3 日本の学校にない厳しさがある(5-15/20)

1.4 授業の仕方が良い(1-16/17)

1.5 クラスが良くまとまっている(0-15/15)

2 中国の小学校の悪い点(168-287/455)

2.1 学校生活がのびのびとしていない(28-108/136)

2.2 学校生活が勉強ばかりで暖かい関わり合いに欠ける(54-78/132)

2.3 すべての子どもを平等に扱っていない（差別的取り扱い）(19-43/62)

2.4 授業が教師主導による一方的な知識伝達である(30-26/56)

2.5 物理的な教育環境が良くない(20-15/35)

（なお、筆者自身の観察から得られた中国の小学校の学級経営に関する現状報告、および日本人と中国人から提出された感想の詳細については当日報告予定）。

3．考　察

以上の調査結果は、日中の差異に着目して考察していくこともできるし、また逆に共通性に着目して考察していくことも可能である。本発表では、共通性に着目して考察する（差異については、高橋(1998)を参照）。

今回集められた感想を全体的に見ると、自分たちの教育理念・価値観に基づいて相手を批判し合う、または疑問をぶつけ合うという形にはならず、主に「一方が相手を批判し、批判された側はその内容について相手を肯定」するという形になった。つまり、両国の現実が大きく異なっているにもかかわらず、双方は一定程度共通する価値観を有していたと理解できる。

これは、現象面の違いを人々の考え方・価値観の違いによって説明しようとする「文化的説明」の限界を意味すると考えられないだろうか。「文化的説明」は基本的に次のような仮定に基づいている。すなわち、ある国で現実に行われている教育実践と人々の考え方の間には必ず高度な整合性が存在し、一つの体系をなしているのであって、現実の違いの背後には必ず考え方の違いが存在する、という仮定である。

しかし、現実において驚くべき違いが存在しながら、価値観を一定程度共有している場合もありうることを、今回の調査結果は示している。もちろん、ひとまずこの仮定に基づいて研究を進めることはマイナスばかりではあるまい。日米比較研究はこれまで主にこのアプローチを採ることによって、高い成果を収めてきたと言える。ただ、それは日本とアメリカの間に、政治・経済・社会面におけるある程度の共通性が存在したためかも知れない。ならば、日中比較研究の場合にも、それが通用するかどうか疑問であろう。少なくとも、日米比較の場合以上に、「構造的説明」を重視する必要があるように思われる。

【参考文献】

高橋克己「学級経営に関する日中比較　――観察に基づく原理的検討を中心に――」『日本教育学会第57回大会自由研究発表要旨集録』1998、100頁。

Tobin,J.J., Wu,D.Y.H. & Davidson,D.H., *Preschool in Three Cultures: Japan, China, and the United States*, Yale University Press, 1989.

恒吉僚子「文化と社会構造　――日本人論の比較社会学的考察――」『思想』1992.1.

NII-Electronic Library Service